

「教師みらいプロジェクト・partⅡ」事業計画（案）

《 コンセプト 》

教育のハイブリッド化を進めよう ～ <ゆとり教育世代>が近未来を創る！！ ～

【 3つの総合化・ネットワーク化 】

- ① <インクルーシブ教育>システム（多様な学びが可能な空間・時間・仲間）
- ② <ソーシャル・ワーク>システム（外部資源の発掘、導入、協働）
- ③ <チーム学校>システム（地域学校協働活動）

(1)「ゆとり教育世代」

現在の23～24歳（教職新採用世代）を中心とした、18～32歳の世代は、下記の表に見られるように、多かれ少なかれ、学校教育時代（小学校、中学校、高校）を、「ゆとり教育」として過ごしてきた年代です。

特に、バブル崩壊後に誕生した現在25～32歳の人は、「ゆとり教育」と「脱ゆとり教育」の両方を経験した、実験台のような存在だったともいえます。

この「ゆとり教育」の評価が下されるのは、これからの本格的な多様性、情報化時代を迎える、近未来においてでしょう。

私たちは、今こそ「ゆとり教育」時代を送ってきた人たちが、新しい世の中を創る担い手になっていくものと信じています。

自らのストレンクスを活かしながら、高齢化世代とともに生きる近未来の創造をめざすであろう「ゆとり教育世代」に向けた支援プロジェクトを設立したいと考えています。



「ソーシャルワークの構成要素」より

【参考資料1】

学習指導要領の<授業時数>から見た
「ゆとり教育世代」

○<年齢:2019年時点>



33歳 ⇒ 「詰込み教育」
《1984年臨時教育審議会～1993年施行》
「個性重視の原則」、「生涯学習体系への移行」
「国際化、情報化など変化への対応」

32歳 ⇒ 「中3～高3ゆとり」
31歳 ⇒ 「中2～高3・・・」 ★バブル崩壊後に誕生
30歳 ⇒ 「中1～高3・・・」 ↓(ブラックマンデー1987年)
29歳 ⇒ 「小6～高3・・・」 「ゆとり」+「脱ゆとり」経験
28歳 ⇒ 「小5～高3・・・」
27歳 ⇒ 「小4～高3・・・」
26歳 ⇒ 「小3～高3・・・」
25歳 ⇒ 「小2～高3ゆとり」

《2007年教育再生会議～2013年完全施行》
「授業時間の10%増(必要に応じて土曜日授業の復活)」

24歳 ⇒ 「小・中・高完全ゆとり教育」

23歳 ⇒ 「高一(理数)脱ゆとり」
22歳 ⇒ 「小・中一部脱ゆとり」
21歳 ⇒ 「小(高)・中(2,3)脱ゆとり」
20歳 ⇒ 「小4～脱ゆとり」
19歳 ⇒ 「小3～脱ゆとり」
18歳 ⇒ 「小2～脱ゆとり」
17歳 ⇒ 「完全脱ゆとり」



25年後の今、ようやく国がこの必要性を強く感じ、動き始めた。ゆえに、研究は、20年先を見据えて行うもの！！

(2) 「教育のハイブリッド化」

自動車業界では、今やハイブリッド車は当たり前？！

電気(モーター)と、ガソリン(エンジン)を効果的に組み合わせ、補完し合いながら、以下の3つのシステムが導入されています。

【参考資料2】

① スプリット方式(シリーズ・パラレル方式)

○動力分割機構を設け、エンジンとモーターの両方を動力源として上手く使い分ける方式。発進や低速時には、モーターを使用。速度が上がるとエンジンも併用し、両方を効率よく使いながら走行する。

② シリーズ方式

○基本的にはバッテリーの電気でもーターを回して走り、電気がなくなるとエンジンで発電機を回して発電し、モーターで走行する仕組み。エンジンで走らないので、動力で分類すると電気自動車に含まれる。

③ パラレル方式

○エンジンとモーターの出力軸は同じで、発進時や加速時などパワーが必要なときにモーターがエンジンをサポートする仕組み。最近では、モーターだけで走るモードを備えたシステムも存在している。

同様に、教育界でも、個性、価値観の多様化時代にあって、異なる業種、価値観、人種等との連携、協働のハイブリッド化が求められています。

既に、定着しつつあるものとして、次の、「3つの総合化・ネットワーク化」が挙げられます。

① <インクルーシブ教育>システム (多様な学びが可能な空間・時間・仲間)

⇒ 「特別支援教育」：特別支援学校、特別支援級などの、共生社会形成に向け、今や、「インクルーシブ教育システム」構築のために必要不可欠なものになってきています。 ① スプリット方式(シリーズ・パラレル方式)

② <ソーシャル・ワーク>システム (外部資源の発掘、導入、協働)

⇒ 「スクール・カウンセラー(ソーシャルワーカー、ロイヤー等)」：いじめ、不登校、虐待、貧困、ひとり親等の社会的問題において、介入の必要性が生まれ、導入されてきています。 ② シリーズ方式

③ <チーム学校>システム (地域学校協働活動)

⇒ 「コミュニティ・スクール」：地域全体で未来を担う子どもたちの成長を支えるものとして、「学校運営協議会」、「地域学校協働本部」などを設置し、地域と学校が相互にパートナーとして連携、協働しながら、取り組んでいる学校、地域がでてきています。 ③ パラレル方式

上記の①～③のシステム(まだ見えてきていない面からも検討していく必要あり)は、一見、「学校経営」にかかわる課題のように思われるでしょう。

ところが、よく考えてみると、これらのシステムは、学校、地域というすべての環境のなかに機能化されていなければ、その中で生活する人間(子ども、家族、地域住民、学校職員等)にとって、<居場所>にはならず、安心、安全の欲求、所属、愛情の欲求も充足されず、人間関係にも不安をもつことになります。

したがって、その基盤になるのは、

子どもたちが生活する<家庭>のホーム・ベースであり、<学級>のホーム・ベースです。

そして、担任教師が働きかけるのは、

「<家庭>のホーム・ベースづくり」と「<学級>のホーム・ベースづくり」です。

さらに、そのための「教師としての<学びの場>」を、自ら求めなければなりません。

(例) 校内での研修：「研修2部制」「コンサルテーション」

若い先生方に学んでもらうのは、<教材開発>、<学級づくり>はもちろん、

<自分に合った学びのスタイル>など、「個に応じた学びの多様性」をも、考えたいものです。

☆ 身近なところで可能な、そして、持続可能な「学びのスタイル」を考えてみましょう。